

平成 15 年度八戸工業大学公開講座

根 城 安 伯*・佐 藤 松 雄**・月 舘 敏 栄***
福 原 長 寿****・木 村 昭 穂*****・渡 辺 武 秀*****
阿 波 稔*****・太 田 勝*****
信 山 克 義*****

Open College 2003 of the Hachinohe Institute of Technology

Yasunori NEJOH*, Matsuo SATOH**, Toshiei TUKIDATE***, Choji FUKUHARA****,
Akio KIMURA*****, Takehide WATANABE*****, Minoru ABA*****,
Masaru OHTA***** and Katsuyoshi SHINYAMA*****

Abstract

Eleven years have passed since the open college of Hachinohe Institute of Technology (HIT) started and all the departments participated in the open college. The aims of the open college are to make open the information of HIT, exchange the ideas, understand each other and contribute to culture and industry in the community. The open college would be the best way to achieve these aims. This year the open college is characterized by these points: first, all the courses are opened, secondly they are extended from July to November and thirdly those who take courses are asked to pay part of the expense. Each course has the unique content of each development. There are three practices in IT (information technology), two courses in how to make and two are given in introductions giving different topics each time. As a result, all the courses have met the needs and expectations of the community and received a favorable response, which has given the members of HIT great satisfaction. According to the questionnaire, most people approve of the courses, while they ask that the open college should be extended to another places, to longer period and to higher level. The open college not only contributes to the understanding and the development of HIT but also to the progress of the culture and industry in the northern Tohoku district.

Key words: Open College, IT, How to make, Lectures

1. はじめに

今年度は昨年に引き続き、全学科および総合

教育センターの参加で開催した。各講座は、部局の特徴を盛り込み、八戸工業大学でないと実現できなかった講座もあり、地域や市民の方々の期待と要望に応えるべく開始された。

八戸工業大学は北東北の学問、教育、学際的研究の中心的な高等教育機関である。本学はまた、大学の情報公開、地域住民との交流・相互理解を目的に、地域に根ざした教育・研究を通して地域文化・産業に貢献することを志している。その実現のため、本学教員・職員・学生と地域の方々との交流・相互理解が不可欠であり、

平成 15 年 12 月 19 日受理
* 電子知能システム学科・教授
** 機械情報技術学科・教授
*** 建築工学科・教授
**** 生物環境化学工学科・教授
***** システム情報工学科・助教授
***** 総合教育センター・助教授
***** 環境建設工学科・講師
***** 機械情報技術学科・講師
***** 電子知能システム学科・講師

公開講座の開催は、それを達成するための最も優れた方法の一つである。この公開講座を通じて、地域社会に貢献できる最新の知見を提供すること、国際交流の可能な情報を公開すること、能力を向上させる知識を提供すること、研究情報を産業へ応用することが可能である。

2. 開講に向けて

2.1 ワーキンググループの発足

今年度の公開講座を開講するにあたり、委員長、副委員長および各学科と総合教育センターから各1名の委員からなるワーキンググループ(表1)を発足させた。ワーキンググループでは、開講講座とその内容、開催時期、予算、その他公開講座の開催/運営に関する全てについて検討した。主な決定事項は以下の通りである。

- (1) 6学科と総合教育センターが、それぞれ1つの講座を開講し、特徴を生かした内容にする。
- (2) 講座の構成は、情報技術(IT)、もの作り、講演の3区分を設ける。
- (3) 各講座の開催時期が集中することを避け、8月から11月までに分散させる。
- (4) テキストその他の実費など、何がしかの受講者負担をお願いする。

この中で、(4)は受講者に講座内容に相応しい受益者負担をお願いし、大学側スタッフには有料に値する責任ある運営を促すものである。

2.2 広報活動

ワーキンググループでは、7講座を1枚にまとめたポスターおよびチラシを作製し、各機関(八戸市教育委員会/各公民館/八戸市内高校/中学校/小学校/マスコミ・メディア各社/記者クラブ/後援各機関/その他、書店、銀行など)に配布した。また、新聞(デーリー東北紙)に計2回折込を依頼し、八戸市および階上町の一部地域の家庭にチラシを配布した。なお、各講座では、独自のポスターおよびチラシを作成し広報した。ポスターおよびチラシには、7講座全ての情報(講座分類、名称、開催時期、問合せ申込先(担当部局))を掲載するように配慮した。本講座の実施にあたっては、10機関(青森県/八戸市/八戸市教育委員会/青森県工業技術教育振興会/東奥日報社/デーリー東北新聞社/NHK八戸支局/青森放送/青森テレビ/青森朝日放送)から後援を頂いた。また、青森県の「生涯学習フェア2002」に参加し、他の参加機関とともに県民の生涯学習振興に寄与した。同時に、青森県民カレッジに登録し、カレッジの単位認定を行った。

3. 開講講座の概要

開講した7講座の内容は、IT(情報技術)に関する3講座、ものづくり2講座、講演会形式2講座である。開催場所は、八戸市のほか、青森

表1 平成15年度八戸工業大学公開講座ワーキンググループ

委員長	電子知能システム学科	教授	根城 安伯
副委員長	機械情報技術学科	教授	佐藤 松雄
委員	機械情報技術学科	講師	太田 勝
委員	電子知能システム学科	講師	信山 克義
委員	環境建設工学科	講師	阿波 稔
委員	建築工学科	教授	月舘 敏栄
委員	生物環境化学工学科	教授	福原 長寿
委員	システム情報工学科	助教授	木村 昭穂
委員	総合教育センター	助教授	渡辺 武秀
庶務	教務部教務課	主事補	高橋 麻子

市、弘前市の 3 市である。受講者数は延べ人数で約 730 名（人数×日数）、参加作品（コンクール応募作品）は約 110 点であった。それぞれの講座運営に当っては、教職員の他、学生がスタッフとして加わった。講座の内容は、以下に示す通りである。

3.1 マイパソコンを作ろう！（機械情報技術学科）

期間：10/12～11/16（全 7 回）、27 組（34 名）

本講座は機械情報技術学科 1 年の前期に開講されている「パソコン工作学」において行っている、パソコンの組立、ソフトのインストール、ソフトの使用方法について実習する内容になっている。部品からパソコンを組み立てることにより、パソコンの構造を理解することができる。また、ソフトの使用方法では、パソコンでこんな事ができる、といったパソコンの活用方法について実習を行い、IT の普及を目的として開講している。

本年度は、パソコンの組立の部品を学科内にあるパソコンを分解したものを使用した。このため、受講時の参加費が受講料だけになり、より参加しやすいものとなり、受講の申し込みが昨年よりも増加した。

第 1 回では、パソコンについての講演、その後パソコンの組立を行った。パソコンを組み立

てる前に、パソコンを構成している、各種の部品についての役割や構造について説明を行った。その後、パソコンを部品から組立を行った。

第 2 回では、OS のインストール、ソフトのインストールを行い、部品から市販のパソコンの状態まで組み上げた。

第 3 回では、文字入力や Windows の基本操作を行った。

第 4, 5, 6 回では、ソフトの使い方をを行った。受講者の希望にあわせた講座を行うため、アンケートにより講座の内容を決定した。内容を挙げると以下ようになる。

- 1) 年賀状の作成
- 2) 家計簿の作成
- 3) 住所録の作成
- 4) カレンダーの作成
- 5) HP の作成
- 6) 名刺の作成

本講座が新聞で紹介された記事を図 1 に示す。

各回の講座終了時には、拍手が興るほど、公表であった。公開講座修了後に実施した、アンケートによる講座の感想を以下に示す。

- ・本体の内部に直接触れられたこと、ホームページの作成、登録など、参考になり参加して本当に良かったと思います。
- ・先生のわかりやすい講座が良かった。生徒さんも親切で良かった。お茶、お菓子もあった。



図 1 公開講座記事（毎日新聞 平成 15 年 10 月）

てよかった。

- ・一回だけでは操作が困難であるような感じである。
- ・講師の先生、アシストの学生さんにはせっかくの休日にご指導いただき心から感謝申し上げます。
- ・パソコンは持っていたが、組み立てたことはなく、実際に組み立てることができてよかった。
- ・指導の学生が丁寧に教えてくれてとても良かった。
- ・組立、解体、インストール等、ハード面にもっと時間が欲しい。(自分で購入して組立をしてみたいため)

本年度も学生スタッフ(3年,4年)を実習の補助として配置した。スタッフの中には、パソコンの操作に詳しい者とそうでない者がいたが、それぞれ自分のわかる範囲で熱心に説明しており、アンケートの結果からもわかるように、大変好評であった。学生スタッフについては、学生の勉学意欲向上や受講生との対話によるコミュニケーション能力の向上を目的として来年度も実施していきたいと考えている。

今後の課題としては、本年度は受講者の人数が増加したが、それに伴いスタッフの人数が不足した。特に、学園祭と重なる第1回,第2回は、研究室、サークルの方に出席しなければならない学生が多く、スタッフの人数が不足していた。この点については、日程の調整等も含めて検討する必要がある。

また、受講者の要望が異なるため、それに対応して様々な内容を行ったため、時間が足りなくなった回があり、この点についても、内容がある程度絞って、講座を行うように検討する必要がある。

3.2 プレゼンテーション入門講座(電子知能システム学科)

開催日: 8/4-8/8の5日間

受講者数: 29名

公開講座の目的及び概要

近年,我々の暮らしの様々な場面でIT(情報通信技術)化が進み,パソコンが急速に普及している。そのため,情報ネットワークの活用能力を備えた人材が職種を問わず必要とされている。そこで,電子知能システム学科では3年前から地域住民を対象にしたIT講座を毎年開講している。本講座は,本学科に設置されているネットワークコンピュータ演習室を利用して行っているが,この演習室にはネットワーク(LAN)で繋がれた53台のパソコンを始め,カラーレーザープリンター,インクジェットプリンター,大型プリンター,イメージスキャナー,液晶プロジェクター,デジタルカメラ,ムービーカメラ等,多くの情報メディア機器を完備している。

昨年度及び一昨年度は,パソコン初心者を対象にインターネット,電子メール,デジタルカメラの利用方法,WordとExcelの基本操作など,基礎的な教育プログラムで実施した。さらに,多くの学生スタッフを登用し,きめ細かいサポートを実現した。その結果,受講者から大好評となり,さらに発展的かつ実践的な講座を望む声が多く寄せられた。そこで,今年度はプレゼンテーションソフトを用いた講座を開講することとした。アプリケーションソフトは世界的に普及しているPowerPointを使用した。

本学科の公開講座は社会のニーズとマッチングしているため,毎年応募者が200名以上殺到し,定員30名を大幅に超えていた。その結果,受講できない応募者が多数発生し,地域住民の要望に対して十分に應えることができなかった。そこで,今年度は受講対象者を教育関係職員や企業の方などに限定し,広報及び募集を行った。その結果,応募者は32名となり応募者数を大幅に抑制することができた。しかし,定員20名を超えてしまったため,定員を増員して対応することにした。受講者は,会社員及び教員の方がそれぞれ9名(31%)と多く,次いで公務員の方が6名(21%),看護師の方が4名

(14%)であった。この結果から、プレゼン技術が必要としている職種がある程度わかる。

表 1 に本講座のプログラムを示す。初日から 3 日間は、テキストを使用しながらアプリケーションソフトの基本操作に関する説明と演習を行い、画像や動画、効果音、アニメーション等を取り入れる方法も解説した。また、受講者に各自プレゼンテーションのテーマを決めて頂き、インターネットやデジタルカメラ等の情報メディア機器を用いた情報収集と、テーマに沿ったスライドの作成も同時に行った。4 日目

は主に個別レッスンを行い、聞き手にとって見やすくわかりやすいスライドになるようにサポートした。最終日(5 日目)は受講者全員に各自のテーマで口頭発表をして頂き、発表後質疑応答と講評を行った。表 2 に受講者の発表テーマ、図 1 に受講者のスライド作品、さらに講座の様子を写真 1 に示す。なお、本講座は昨年と同様夜間に開講し、有職者が仕事帰りに参加できるよう配慮した。また、スタッフは教員 1 名、学生スタッフ 5 名、計 6 名体制とし、受講者に対しきめ細かくサポートした。

表 1 公開講座「プレゼンテーション入門講座」プログラム

月日	曜日	時間	分	講座内容
8 月 4 日	月	18: 00～18: 10	10	テキスト販売
		18: 20～18: 30	15	学科長挨拶, スタッフ紹介
		18: 20～18: 35	15	受講者紹介
		18: 35～18: 45	10	第 1 章 Power Point の概要
		18: 45～19: 00	15	Power Point の活用例紹介
		19: 00～19: 30	30	第 2 章 Power Point の基本操作
		19: 30～19: 45	15	休憩
		19: 45～21: 00	75	第 3 章 アウトラインを使ってプレゼンテーションを作成しよう
8 月 5 日	火	18: 00～19: 30	90	第 3 章 アウトラインを使ってプレゼンテーションを作成しよう
		19: 30～19: 45	15	休憩
		19: 45～21: 00	75	第 4 章 プレゼンテーションの内容を構成しよう 第 5 章 見栄えのいいスライドに仕上げよう
8 月 6 日	水	18: 00～19: 30	90	第 6 章 プレゼンテーションを実行しよう 第 7 章 ブラウザーで表示できるプレゼンテーションを作ろう 第 8 章 Power Point を使いこなそう
		19: 30～19: 45	15	休憩, アンケート用紙配布
		19: 45～21: 00	75	プレゼンテーション作成 (個別レッスン)
8 月 7 日	木	18: 00～19: 30	90	プレゼンテーション作成 (個別レッスン)
		19: 30～19: 45	15	休憩
		19: 45～21: 00	75	プレゼンテーション作成 (個別レッスン)
8 月 8 日	金	18: 00～20: 10	130	★★★ 発表会 ★★★
		19: 10～19: 25	15	休憩, アンケート用紙回収
		20: 25～21: 00	35	修了証, 記念写真の贈呈

表2 発表テーマ

テーマ名
わんぱく野菜のご案内
会社案内
学校紹介
八戸高校はこんなところ
私の職場
八戸市内 行政視察コース (案)
お花を贈りましょう
八戸市の苺あれこれ
鬼ごっこ
平安時代末期の政治
大好きノノいかだまつり
高校生の1日看護体験
八戸屋台村 みろく横丁
噴水を画く ～数式と形～
白銀小学校吹奏楽クラブ
種差の草花ウォッチング
糖尿病教室
お役立ち情報
我が家の朝
これからの商店のあり方について
N家の家族旅行 (夏)
我が家のがんばれ百歳
地域と学校が連携協力した体験活動・奉仕活動推進事業
年賀状
スポーツ格闘技の融合による北東北地域の活性化
私の上半期いろいろ

抜粋

受講者の反応

受講者に対して講座に関するアンケートを実施した。それらに書かれていた感想の一部を以下に記す。

- ・パワーポイントの講習があればと思っていたのでありがたかったです。
- ・様々な職業の方が参加していたため、人間的にも成長できました。
- ・受講者を限定したことにより、レベルが皆同じだったので良かったです。
- ・学ぶことの楽しさを再発見しました。笑っていたのは良かったです。
- ・目標 (良い見本) を設定し、やってみたいと思うことができ、さらに他の受講生の方からの刺激を頂き、頑張ることができました。
- ・先生の解説がとてもわかりやすく、よく理解できました。
- ・テキストにはない、先生ご自身の体験からのアドバイスが効果的でした。
- ・学生スタッフの方々から丁寧なアドバイスを頂き、本当に感謝しております。
- ・学生さんが本当に親切で、ミスオペレー



図1 スライド作品 (一例)



写真1 公開講座の様子

ションを良くカバーしてくれました。

- ・八工大のイメージがとても良くなりました。勉強するには素晴らしい環境です。
- ・広いスペースで勉強ができる環境なので、学生に戻りたいと思いました。
- ・お茶菓子の準備をはじめ、皆様の心配りのおかげで有意義な5日間となりました。
- ・一人でも多くの人にこの充実した気持ちを味わってもらいたいのので、継続した開催をお願いしたいです。

学生スタッフへの効果

毎年感じることであるが、学生は受講者に対して礼儀正しく、丁寧な言葉使いで対応をとることができ、受講者はもちろんのこと我々教員も感心させられる。また、学生は数日間ではあるものの地域住民と密接に交流を図ることによ

り良い刺激を受け、人間的にも確実に成長している。よって、公開講座のもたらす学生への効果は目を見張るものがあると言えよう。

課題

本学科では、3年前からIT講座を継続して実施しているが、微力ながらも地域住民のIT教育に対して貢献できているものと自負している。一方、最近では本学以外の教育機関や公共団体でもIT講座を実施するようになり、パソコン教室もここ数年で急激に増加しているため、地域住民のIT教育環境は整ってきていると思われる。よって、IT講座ばかりにこだわらず、今後も社会のニーズに沿った内容の講座を的確に選定し、地域に密着した大学としての役割を果たしていく必要がある。

3.3 青森の暮らしと建設材料／ ～現在・過去・未来～(環境建設工学科)

開催日：9月19日(青森)、10月3日(弘前)、
10月18日(八戸)

受講者数：青森…22名、弘前…20名、八戸…
20名 合計62名

公開講座の目的

環境建設工学科では、一般市民および中堅技術者を対象に、青森県における環境建設工学の役割と理解を啓蒙し、さらに中・長期的な視点からの学生募集活動や地域への技術還元に寄与することを目的として、専門分野毎に公開講座を実施してきた。今回は、本学科の材料分野が主担当(教授・庄谷征美、教授・杉田修一、講師・阿波 稔)となり実施した。その概要を報告する。

講座の内容

本講座は、一般市民および中堅技術者を対象とした講義形式とし開催した。そして、以下の3つの内容(テーマ)を青森県内、青森市(9/19:青森県観光物産館アスパム)、弘前市(10/3:弘前商工会議所会館)、八戸市(10/18:八戸工業大学)の3会場において各2時間程度で実施した。

青森の暮らしと建設材料

現在：コンクリートは生きもの！(杉田教授)
…コンクリートと生きもの(生物)の類似性について面白く解説

過去：青森県における近代土木遺産(阿波講師)
…青森県における近代土木遺産を紹介し、市民あるいは技術者、地域との係わりを考える

未来：寒冷地と材料設計の最新技術(庄谷教授)
…寒冷地における最新の材料設計技術とその未来についての講義

また、本年度は、受講者から参加費(一般：1,000円、高校生以下：500円)を徴収した。こ

れら参加費は、講座テキストの印刷費や受講者への軽食(サンドイッチ)・飲み物代、駐車場料として使用させていただいた。

なお、本講座の宣伝用ポスターを図1に掲載した。このポスターは、八戸工業大学の地区アドバイザー(青森)、青森県生コンクリート工業組合、青森県建設業協会を通じて県内の高校や建設関連の企業などに配布していただいた。ここに、紙面をかりて公開講座のポスターの配布に多大なご協力をいただいた関係機関および各位に深甚なる謝意を表します。

受講者とその反応

今回の講座により、八戸市のみならず青森市、弘前市の建設技術者を含めた一般市民の方々に環境建設(土木)工学の役割を広く知っていただく機会をいただいた。また、設定された3テーマは、環境建設工学に関わる一般的な優しい話から専門的(技術的)な内容に至るまで非常にバラエティーに富んでおり、受講者の方々には退屈せずに熱心に聞いていただいたものと考えている。その様子を写真1に示す。

受講者は、青森市22名、弘前市20名、八戸市20名の合計62名であった。受講者の多くは、県内各地の建設業関連の技術者であった。しかし、中には本学科を志願している高校生も参加しており、高校教員の引率のもと出張講義的なイメージで受講されていたようである。

以上のように、本講座を講義形式で出前講座的に県内複数ヶ所で実施したことにより、建設技術者をはじめ高校生など多くの一般市民の方々と交流を深めることができ、当初の目的を十分に達成できたものと考えている。



写真 1 公開講座の様子



写真-1 HP シェルの説明をする坂本先生

街づくりや景観学習教育に役立つ講座にすることとした。また、街づくりコンクールの課題は、中心商店街の中にある駐車場を市民広場として整備することである。

「総合学習のためのペーパークラフト・街並み・景観学習講座」は、8月4-5日の2日間の予定で行ったが、各小中学校行事と重なったために参加者が6人と少なかった。大学祭時には、ペーパークラフト講座の一環として折り紙建築講座と第3回「住みたい街・住みたい家づくり」コンクールの表彰式を実施した。応募作品が100点を超え、表彰式にも応募者に保護者を加えると100名以上の参加があった。

3.4.2 総合学習のためのペーパークラフト・街並み・景観学習講座

8月4-5日の2日間に渡って実施した講座の初日は紙による照明器具のデザイン、二日目はフェイスハンティングによる街並み探検調査とそのまとめ方を行った。参加者は6名と少なかったが、不思議さに楽しさが伴った講座となった。

(1) ペーパークラフト講座

ペーパークラフト講座の一環として、坂本教授が研究を続けているHPシェルを応用した照明器具を活かした物づくり体験学習を行った。長方形に切断した工作用紙を組み立てていくと曲線の照明器具ができることに大いに不思議さと興味をかき立てられてた様であった。完

3.4 「総合学習のためのペーパークラフト・街並み・景観学習講座」及び 第3回「住みたい街・住みたい家づくり」コンクール（建築工学科）

3.4.1 公開講座の概要

昨年度の建築工学科の公開講座は「風水講座」と「街づくりコンクール」の2本立てであったために運営及び経費上の課題が多く、今年度は街づくりコンクールを取りやめることを検討していたが、作街づくりコンクール品集の評判も良く、継続することになった。従って、今年度も「総合学習のためのペーパークラフト・街並み・景観学習講座」及び第3回「住みたい街・住みたい家づくり」コンクールの2本立で実施することになった。

今年の公開講座の狙いは、小中学校における総合教育の一環として行われている物づくりと

成した照明器具に灯りをつけると、暗くした講義室に漏れた光の美しさに感激の声が上がった。

(3) 街並み・景観学習講座

晴天の市庁前広場に集合し、三日町・十三日町を対象にデジカメを使いながら、街並みにある顔に見えるもの－フェイスハンティングを行った。普段、漠然と見ていた街並みに消火栓やマンホール、そしてビルの壁と窓が人間の顔に見えるなどの大発見をし、驚きの一日となった。

大学に戻って、デジカメ写真をプリントしてKJ法による調査のまとめを行った。普段、まとめをしている先生方も新しいまとめ方にとまどいながらも、できあがりには納得していた。元伊吉書院の街の駅に街並み探検調査結果を掲示している。

3.4.3 ペーパークラフト講座

大学祭時の公開講座として、ペーパークラフト講座の一貫として、折り紙建築講座を行った。当初は、街づくりコンクールとの関係で実施しない予定であったが、オープンキャンパス・子供科学教室などで評判が良かったので、街づくりコンクール表彰式前までの自由参加で実施した。

折り紙建築とは、一枚の紙に描かれた線を切断、あるいは谷折り・山折りにすることにより、建物のイメージを立体的に折り上げるものであ



写真-3 折り紙建築の様子

る。講座では30分程度できる完成できるミコノスの教会、パルテノン神殿、パッピー・バースディを基本に行い、複雑な自由の女神や秋の風景などはお土産とした。親子連れなど100人以上の参加者があり、クリスマスカードや年賀はがきに应用できるので、特に好評であった。

3.4.4 街づくりコンクール

八戸の中心商店街も郊外型ショッピングセンターに押されて停滞気味であるので、三日町のほぼ中央にある駐車場を楽しい市民広場に造り替えることをテーマとした街づくりコンクールである。

県内及び岩手県北の幼稚園・保育園から高校・大学までを対象に案内した結果、幼児の部52作品、小学校の部25作品、高校の部15作品、大学の部16作品、計108作品の応募があった。

審査は、10月4日に白川直人委員長（八戸工業大学同窓会長）・高橋和雄委員（八戸工業大学建築工学科同窓会副会長）・月舘敏栄委員（八戸工業大学建築工学科）で行った。特に、幼児・小学生の部はみんな楽しそうな提案の作品が多く、審査は難しかった。

大学祭の2日目の午後1時30分から行った表彰式は、応募者に保護者や先生方が加わり、100名を超える参加者によるにぎやかなものとなった。白川審査委員長から表彰を受けた後に感想を聞かれて、とまどいながらも嬉しそうな様子は愛くるしかった。また、文化祭と重なっ



写真-2 街並み探検結果をまとめる様子



写真-4 三日町駐車場の様子

ていた高校生も参加し、高校側の配慮に感謝した次第である。

(1) 幼児の部

幼児の部には 52 作品の応募があり、優秀賞 4 点、入選 11 点、アイデア賞 11 点が選定された。いずれの作品とも、広場の道路がカラフルだったり、お花畑だったりと明るい色彩にあふれた楽しそうな広場の提案が多かった。最優秀賞はなかったものの子供達が期待している街の様子がよく分かる作品であった。表彰式には親子で参加して頂き、賞状と副賞をもらって嬉しそうな姿がにぎやかな会場となった。

(2) 小学生の部

小学生の部には 25 作品の応募があり、最優秀賞には、八戸に春を呼ぶ祭りーえんぶりをテーマとした提案が選ばれた。「広場の中央にはとっ



写真-6 小学生の部最優秀賞 えんぶり公園

ても楽しいえんぶり山のすべり台があり、ゴトンゴトンながーい線路を走るトロッコ。こんな公園であそびたいな!!」とだれでも思うでしょう。優秀賞には、お年寄りや子供に優しい自動車から解放されたふれあい広場や八戸らしい海の幸をイメージした広場が選ばれた。さらに入選 4 作品、アイデア賞として 6 作品が選ばれた。優秀賞の海の幸公園は男子小学生 4 人による作品で、元気いっぱいの表彰式となった。

(3) 高校生の部

県内各高校の文化祭と重なったために作品の応募と表彰式への参加が危ぶまれたが、高校側の配慮で若者らしい 15 作品の応募があった。最優秀賞に選ばれた 2 作品のひとつは、女性らしい優しさにあふれた昔懐かしい屋台村のイメージの広場であった。もうひとつの作品は、スケートボードやスリーオンスリーのバスケットボールができる若者らしい広場であった。単に若者広場を作っただけでなく、現在の駐車場機能は広場の地下に埋め込むアイデアも面白かった。優秀賞・入選に選ばれた各作品には、ライティ



写真-5 幼児の部 表彰式



写真-7 受賞の感想を述べる高校生



写真-9 大学の部 最優秀賞



写真-8 高校の部 最優秀賞

ングに凝った広場、八戸三社大祭広場があり、実現したら面白そうなアイデアが見られた。

(4) 大学生の部

16 作品の応募があり、最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、入選 3 作品が選定された。大学生らしく CG による作品や飛び出す絵本風の作品など専門知識に裏付けされた作品が魅力的だっ

た。最優秀賞は、コンクリート砂漠の冷たい街にガラスによる見えない空間を演出し、都市のオアシスを作り出す提案は極めて現代的であった。一方、優秀賞の昔の駄菓子屋をイメージした作品は人の暖かさを感じさせた。

3.4.5 まとめ

今年度の公開講座は夏休み中の日程が学校行事と重なったために参加者が少なかったが、大学祭時のペーパークラフト講座及び街づくりコンクールは成果があったと考えられる。現在、街づくりコンクール作品集の制作を進めており、冬休み明けに完成した作品集は応募者全員に配布する予定である。

建築工学科の公開講座の次年度に向けた課題の一つは、住宅相談などより専門性を活かした一般市民向け内容にすること考えられる。また、街づくりコンクールは継続する価値がある。

3.5 『自分流のチーズを作ろう』(生物環境化学工学科)

開催日と内容:

第一回 8/9 (土) チーズ製造の体験

第二回 10/25 (土) チーズ試食会と環境を考えるパネル討論会

公開講座の概要

平成 14 年 4 月に生物環境化学工学科が発足して、今年で 2 年目を迎えた。学科内の大型設

公開講座の参加者数

	第一回（8月9日）	第二回（10月25日）
参加者数（予約者数）	29（34）	31（36）
大学側スタッフ	13	14
アルバイト学生	4	3
合計	46	48

公開講座延べ参加者数：94 名

備の設置状況にも拍車がかかってきており、今年 3 月にはチーズ製造大型プラントが生物環境化学工学科棟 1 階の R103 室に搬入された。この設備は、本学科の目玉講義の一つとして位置付けられる体験型学習を、学科の学生たちにチーズ製造を題材にした「ものづくり」を通して楽しく体得してもらい、またチーズの製造過程で発生する廃棄物処理の問題について、自由な発想から解決法を探ってもらうために導入したものである。

今回の公開講座では、一般市民の方々にチーズ製造を実際に体験してもらうことで、本学科の学生教育に対するそのような取り組み姿勢を広く紹介するとともに、環境問題や廃棄物問題について一緒になって考えていくことを目的として開講した。講座は、第一回目のチーズ製造の体験講座と、第二回目の製造チーズの試食会と環境を考えるパネル討論会の 2 回で構成した。各講座の参加人数とアンケートにお寄せいただいた主なご意見を以下に示す。

講座実施後の受講者の意見（アンケートから）
 第一回 8 月 9 日 チーズ製造の体験
 （開催場所：八戸工業大学生物環境化学工学科 R103 室）

- ・公開講座というものは初めての経験でしたが、解りやすく、対応も親切でとても楽しく過ごせました。
- ・チーズ作りがこんなに手間がかかるとは思わなかった。これを知っただけでもチーズをありがたく食べられます。先生方やス

タッフの方々の準備やこれからのご苦労を思うと頭が下がります。10 月の試食会を楽しみにしております。

- ・子どもも楽しめる講座でした。チーズの種類や味などを再確認しました。
- ・八戸工大の中に初めて入り、設備の充実していることに感激しました。面白かったです。
- ・すばらしいと思いますので、今後も開催をお願いします。
 - ・大学に来る機会がありませんので良かったです。チーズの作り方が素人っぽい感じで、本当にチーズができるか不安です。皆さんの対応が感じ良かったです。
- ・先生方のご苦勞に感謝です。工程の中でいろいろなことがあり、大変面白く、貴重な経験をさせて頂きました。手作りチーズを作ることは大変なことだとおもいました。
- ・時間のかかる作業なので、2 日間、または 1 日（午前から）かけてもよかったと思います。

第二回 10 月 25 日 製造チーズの試食会と「もの作りを通して環境を考える」討論会
 （開催場所：八戸商工会議所 4 階大会議室）

- ・工場でチーズを製造する流れが少しわかり、よかったと思います。家庭でできるチーズの作り方にも興味がありました。また、チーズを通して環境を考える機会をつくっていただき、ありがとうございました。
- ・大学の講座って和気あいあいでおもしろいですね。

- ・自分で造ったチーズを時間をかけて再度楽しめるのがうれしいです。
- ・いろいろな話を聞くことができて大変良かったです。ホエーのことがすごく興味深かったです。
- ・先生方の研究には、心ワクワクします。
- ・準備して下さった先生方やスタッフの方々にお世話になりました。ありがとうございました。今後も参加できる講座があれば是非参加させていただきます。
- ・チーズ作りは楽しかったです。環境問題を考え、将来の世代へつないでいく私達の課題は何なのか、考える時間を持つことができました。先生方のご苦勞に感謝いたします。

まだまだたくさんのご意見をいただいたが、そのほとんどが今回の公開講座が受講者にとっ

て好評であったことを示すものであり、開催者側の満足度を充足するものであった。

今年度の講座を終了して

今回の講座実施にあたり、チーズ製造設備の収容スペースの制限から募集定員を30名と限定したが、申込者数はそれを越える盛況ぶりであり、やむなく参加をご辞退いただいた方々も多数おられた。来年度以降の検討課題としたい。しかし、その分、参加された方々のチーズ作りに取り組む姿勢には真剣なものがあり、3ヶ月の熟成期間を経て試食会に供されたチーズの味わいをじっくりと楽しんでおられたようである。また、参加者のなかには、親子同伴の小学生も3名おられ、夏休みの自由研究の題材として参加なされたとのことであった。小さな受講者が今後が増えることが予想され、講座の内容や題材選定のデータとしたい。

3.6 アニメと双方向ホームページを楽しもう / (システム情報工学科)

— Flash によるアニメ & Web —

開催日：平成15年9月6日(土)～7日(日)10:00～16:00

受講者：21名

公開講座の目的

FlashはベクターベースのWebアニメーションデザインツールである。特徴は画像をベクターで扱うために、画像を拡大縮小してもビットマップ画像のように乱れずデータサイズを小さくできるので、世界中の多くのユーザによって使用されている。特に、Webページのインターフェースやモーショングラフィックス、ストーリーのあるアニメーションオンラインゲーム、CGIと連動したWebアニメーション開発など、様々な作品の制作に使用されている。このようなことから、FlashのようなベクターベースのWebアニメーションデザインツールがおおいに利用されていく傾向にある。そこで本講座では、ベクターベースのWebアニメー



ションデザインツールである Flash の基本操作修得と、アニメーションの作成、そしてインタラクティブなホームページの作成を目的として開催した。

日程と講座内容

本公開講座は、2 日間に渡って行われた。講座の内容は表 1 に示すように、公演、実習よりなっており、講演は「情報科学への招待」、そして実習は Flash の基本的な使い方と、ホームページ作りに付いて行った。まず初日は、Flash の基本的な使い方や、描画の基本であるグラフィックワーク（基本図形の描き方、図形の分割・型抜き、シンボルの理解、グラデーション）、そしてアニメーションワーク（オブジェクトの移動、変形、回転、レイヤーを駆使したアニメーション）に付いて行った。二日目は、ホームページ作りでインタラクティブなアニメーションを作るためにボタンシンボルの基本的な利用（ボタンの

作成、ボタンアクションの設定、アニメーションの作成)を行った後、インタラクティブなホームページの作成を行った。写真 1 は講座の様子を示したものである。

受講者の反応とまとめ

受講者数は 21 名で、全員がパソコン経験者であり、受講者の最年少は小学校 1 年生であった。受講者のほとんどは八戸市民であり、なかには情報システム研究所時代から毎回出席というサポーターもいた。実習では市販のテキストを採用した。テキストは、Flash の基本的な使い方から、アニメーションが簡単に作成できるように工夫され、メモ書きがなされており分かりやすいと好評であった。図 1 は、初日に作成した受講生の作品例で、ムービープレビューによるアニメーションの一部分を示したものである。図に示したように、受講生の皆さんがそれぞれに工夫し、素晴らしい作品を作られていた。

表 1 公開講座の内容と担当者

日	時間	テーマ	内 容	場 所	担当者
9 月 6 日 (土)	10:00～10:30	受付	開講式、学科紹介 スタッフ紹介・スケジュール説明 「情報科学への招待」 Flash の基本的な使い方 I-1	サイバーラボ	福原
	10:30～10:40	挨拶		サイバーラボ	苫米地 木村（スタッフ全員集合）
	10:40～11:10	講演		サイバーラボ	苫米地
	11:15～12:00	実習 1		サイバーラボ	木村
	12:00～13:00	昼食			
	13:00～13:50	実習 2	Flash の基本的な使い方 I-2	サイバーラボ	木村
	13:50～14:05	(休憩)			
9 月 7 日 (日)	14:05～14:55	実習 3	Flash の基本的な使い方 II-1	サイバーラボ	清野
	14:55～15:10	(休憩)	～		
	15:10～16:00	実習 4	Flash の基本的な使い方 II-2	サイバーラボ	清野
	10:30～12:00	実習 5	Flash によるホームページ作り I	サイバーラボ	高橋
	12:00～13:00	昼食			
	13:00～13:50	実習 6	Flash によるホームページ作り II-1	サイバーラボ	小玉
	13:50～14:05	(休憩)			
	14:05～14:55	実習 7	Flash によるホームページ作り II-2	サイバーラボ	小玉
	14:55～15:10	(休憩)			
	15:10～16:00	交流会	閉講式、アンケート、感想	I203	受講者・スタッフ全員

スタッフ：教職員(12 名) (苫米地、松坂、尾崎、清野、栗原、高橋、貝守、児玉、木村、本田、山日、福原)、学生アルバイト (5 名) (星、小野寺、相楽、吉田、権代)



(a) 開講式



(b) 受講生を指導する学生スタッフ



(c) 最年少の受講生

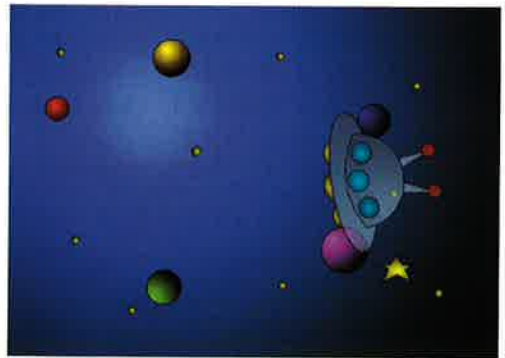


(d) アニメーション作成

写真1 公開講座の様子



(a) ムービープレビューによるコマ1



(b) ムービープレビューによるコマ2

図1 受講生の作品例

講座の締めくくりとして、終了証の授与式を実施した。また、図 2 から図 4 までは席上行ったアンケート結果の一部を示したものである。

図 2 の「本講座が開催されることを何で知りましたか」というアンケートからは、新聞の折り込み広告、広報はちのへ、大学の案内状から本講座を知ったことが多いことが分かる。特に新聞の折り込み広告、広報はちのへを利用した広報が有益であることが分かった。また、新聞の折り込み広告については、皆さんが日常気をつけて見ているように思われる。

図 3 の「講座の内容に満足されましたか」というアンケートからは、講座の内容に満足したが多く、内容に付いて不満を漏らす受講者は 10%前後と低いことが分かる。これは、Flash の基本的な使い方に重点を置き、段階的に内容をレベルアップしながら、公開講座を通して一つの作品を完成させたことによる充実感によるものと思われる。

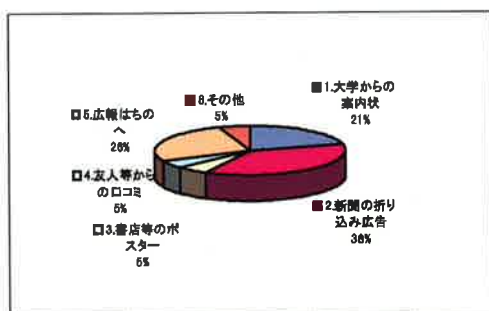


図 2 本講座が開催されることを何で知りましたか？

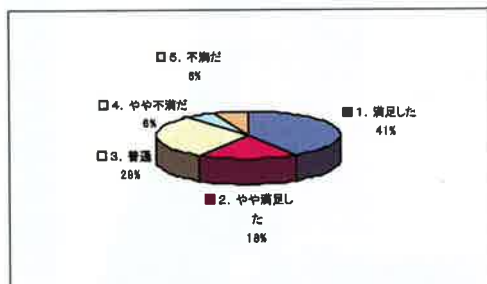


図 3 講座の内容に満足されましたか？

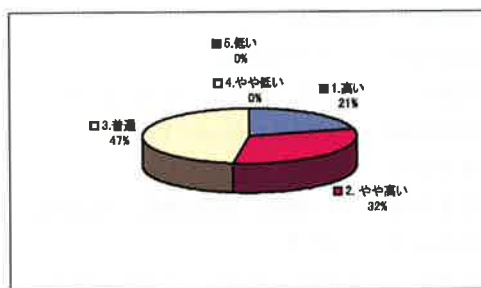


図 4 講座のレベルをどう感じられましたか？

のと思われる。

図 4 の「講座のレベルをどう感じられましたか」というアンケートに関しては、やや高いという傾向にあり、レベルが低いと不満を漏らす受講者は 0%であった。

講座を通しての感想では、絶対時間が足りなかったのではとか、覚えきれませんでしたとか、このような講座に次回も参加したい等があった。また、アルバイト学生に対して懇切丁寧で有り難うなどがあった。

公開講座はこれまで何回か行ってきたが、一般市民を相手にする場合、より分かりやすく説明する工夫も必要であるように思われる。本講座を受講してくださいました受講生の皆さん、2日間の受講有り難うございます。また、会場設営や受講者の指導に協力していただいた学生スタッフの皆さんには、心から感謝致します。

3.7 生涯学習のための教養講座（総合教育センター）

部局：渡辺武秀

3.7.1 公開講座概要

○第 1 回目：海外体験報告します 米国ドーバー市、中国瀋陽市はこんなところ！

—海外研修を通して見たもの—

○第 2 回目：今は昔、男は女を盗み出したが…『今昔物語』の世界

○第 3 回目：世界は在るがままに見えているか!? 心理学から見た認知の仕組み

○第 4 回目：八戸をもっと知ろう 八戸市の都

市機能と地域経済

- ＜開催場所＞ 八戸公民館
＜開催日＞ 10/11, 10/25, 11/1, 11/8
＜開催時間＞ PM 6:00～8:10
＜募集定員＞ 40名
＜募集形態＞ 一講座、複数講座、全講座、
＜総申込者＞ 52名
＜各講座＞ 1回目: 20名 2回目: 23名
3回目: 33名 4回目: 26名

3.7.2 講座内容

この講座内容の紹介は、それぞれ担当者の先生に執筆をお願いした。ただ「第1回目」は山本先生が担当。

第1回目【「米国ドーバー市、中国瀋陽市はこんなところ！」町屋昌明 山本忠】

①アメリカ、ドーバー市

本講座は語学研修の様子を報告することでドーバー市を紹介することに代えた。同市の気候が最も心地よい夏、昨年と本年の二度この地にあるウェスレー大学で2週間の語学研修が行われた。ここはまたアメリカで一番早く入植した土地柄で、多くの歴史的施設、博物館があり、水泳、テニス、サッカーなどのスポーツ活動も楽しめる。

②中国 瀋陽市

本講座の目的を、瀋陽市についての基本的な事柄を紹介した上で、そこに滞在して初めて解る外国の実情、特に一般市民の生の生活の様子、実態を八戸の市民に紹介することとし、併せて本学の語学研修のこれまでの成果も簡単に紹介した。

本講座では、まず初めに本学の中国での語学研修の概要について、実施期日、場所、語学講座の概要などを紹介した。それから瀋陽市についての基礎知識として、中国領土内での位置、人口、民族構成、自然環境、見所となっている観光地を、パワーポイントを使用して説明した。

この講座のメインは写真による瀋陽の紹介である。食事(食品)、清朝の宮殿跡、歴史記念館、高層ビルといった言わば定番の写真のほかに、

栄える商店街の様子、日本と変わらない若者のファッション、朝の公園、裏通りの質素な生活風景、できたばかりの高層マンション、衣料品店内でのけんか、取り壊される古い建物、道路工事に伴う激しい交通渋滞など他では見る機会が少ないと思われる風景や一般市民の生活の様子を見て頂いた。

会場に瀋陽で購入した衣料品や生活用品を展示して、直に手にとって中国を感じて頂いた。

第2回目【『今昔物語集』の世界～歌物語から説話へ～】竹園洋子】

『今昔物語集』は三十一巻一千余話からなる説話集であり、その内容・世界は多様である。

今回の公開講座では、『伊勢物語』と『大和物語』との共通説話を取り上げ比較することにより、『今昔物語集』において、同じ素材を扱いながら歌物語とは違った説話の世界となっていく過程を追ってみた。

『伊勢物語』第六段(「芥河」の段)と『今昔物語集』巻二十七第七を比較する時、男が、盗み出した女を鬼に食われたとする点では両書とも共通しているが、話の中心のおき方はかなり異なっている。

『伊勢物語』ではその話の中心になっているものは男女の心の動きであり、とりわけ、男の女に対する深い思いである。男に背負われて揺れ動く女の心とわずかに心をひらいた問いかけが、そしてそれ以上に、女を失った男のつかの





間の喜びから深い悲しみへと急激に落ち込んでいく心が、ああ女がうちとけてくれたあの瞬間を、と嘆き悲しむ心が、話の中心をなし、歌となる。ここでは、鬼は男の力ではどうにもならないものの象徴であったと思われる。

一方、『今昔物語集』の鬼は、そうした男の絶望感から来るものではない。象徴などではなく、荒れた山荘に、現に住んでいた恐ろしい鬼である。すさまじく荒れ果てた山荘で女が鬼にくわれた事件そのものの、惨憺たる有様に焦点が絞られている。

『大和物語』と『今昔物語集』の同類話（『山の井の水』の段と卷三十第八・「蘆刈」の段と卷三十第五）を比較した時にも同じ事が言える。『大和物語』においては、男の女に対する、女の男に対する切ないまでの思いが話の中心をなし、歌もそれと密接にかかわる。ところが、『今昔物語集』では、そうした心や情とは別の要素

—ここで取り上げた二話においては宿世観—が重要視される。歌と話の関わりも希薄になっている。

以上のような、話を捉える視点の相違が、歌物語とは違った説話としての『今昔物語集』の世界を形成しているのではないかと考える。

第3回目【「心理学から見た認知の仕組み」（当日、「認知」を「認識」にタイトル変更） 佐藤手織】

世界の認識の問題は、古来より哲学的にも大きな問題であった。私たちの見ているこの世界像はいかにして成立しているのかという問いは、この世界像とは別の〈ほんとう〉の世界の存在を暗黙のうちに認めていると言える。このような二元論としては特にデカルトの考えがよく知られており、現在の心理学においても強力なパラダイムであり続けている。

彼の物心二元論を前提とするならば、物理的に実在する世界と心理的に現象する世界を架橋する何らかの変換過程を用意しなければならない。この考えを間接的認識論と呼び、心理学では、上記の変換過程を「感覚」「知覚」「認知」と3段階に分類して考えるのが一般的である。感覚は、物理的実在を比較的ありのままに見るレベルと言える。「色」や「明るさ」の認識は誰が見てもほとんど同様であり、主観による変換が入り込む余地はほとんどない。一方認知は、「美しさ」のように個人の記憶や経験によって大き



く影響を受けるレベルの認識であり、両者の中間である知覚は、例えば時計を見る場合に針だけに注目するような現象である。見る主体による情報の取捨選択が働いている一方で、個体差はほぼ見られない。

一方、20世紀後半に、アメリカの一人のユニークな心理学者によりこの強力なパラダイムに真っ向から対立する理論が提唱され、現在注目を集め続けている。ジェームズ・ギブソンの直接知覚論である。彼は、知覚を生体と環境の相互依存的な関係の中で捉え、両者を別物と見なす二元論を拒否する。生体は、動物として文字通り環境内を自由に動き回り、それに伴う光の流動の中でかえって頭わになる環境の不変的な性質を知覚する。不変項と呼ばれるこの性質こそが、「この橋は渡れる」「この柵は跨ぎ越せる」といった環境の生体にとっての意味（アフォーダンス）を特定するのである。

第4回目【「八戸市の都市機能と地域経済」大津正道 岩村満】

① 八戸の財政と地域経済を考察する 岩村満

1990年代において日本

経済に連動するかのようには八戸地域経済も大きな不振を経験した。即ち、設備投資不況に始まり、景気の中折れを経て、金融デフレの深刻な影響のもとで、地域経済は疲弊しているのである。

そうした状況下にあって、八戸市の財政も逼迫の度合いを強めている。種々の財政指数をとって見ても、そこには財政の硬直化が如実に示されている。その典型が財政力指数であり、公債費指数である。本来ならば、地域経済の立ち直りのためには財政の弾力的な運用が求められる状況である。しかし、経常費が財政に占める割合が高く、市財政は新規事業を起し、地域経済の活性化を担う役割を果たすことは不可能になってきている。

こうした事態に対処するためにも、市町村合



併を実現し、経常費を削減することで、硬直した市財政の建て直しを図らなければならない。また、地域の実情に合った対策が要求されてきている。例えば、輸出だけが産業の活性化、地域振興を齎すとは限らない。輸出は自動車、鉄鋼、家電、電子機器にまかせて、そこで得られた膨大な外貨を活用して、地域の活性化を行うシステムを作り上げるのも一つの可能性を切り開く途と考えられる。八戸は漁業の町として発展してきたが、他方で、魚の消費地としても大きな存在であった。そこで、魚を輸入し、世界中の魚のグルメ基地としての方向性を探り、日本中から消費者を吸引することが八戸の新たな発展に繋がる可能性がある。

② 循環型社会と八戸の経済 大津正道

八戸地域の経済は1990年代からずっと不景気が続いている。昨年末の新幹線開業で観光・消費拡大期待は盛り上がっているものの、県内求人倍率は全国最低の0.3倍を低迷している。

戦後八戸は、64年新産業都市指定後は素材型産業を中心に産業基盤と港湾整備を進めてきたが、不況後の産業構造転換（高度技術・貿易促進）が必ずしも順調ではない。八戸経済のこれからの方向は、新産都市時代の産業基盤を最大限に活用できるような、資源循環型システム＝環境・リサイクル産業の育成にある。

資源循環型社会とは、20世紀までの大量生産・消費・廃棄の社会から資源抑制と環境負荷



軽減のため廃棄物リサイクル＝再資源化をめざす 21 世紀型のシステムをいう。八戸地域は一般廃棄物（生活ゴミ）処理ではリサイクルプラザで資源ゴミの再資源化を行っており、また産業廃棄物では田子・二戸地区での大量不法投棄問題を抱えつつ、「あおりエコタウン」と「環境・エネルギー特区」で資源循環と環境エネルギー産業育成に本腰を入れ始めている。

この方向の成否には、資源リサイクルと不法投棄処理プランの先進モデルである北九州と香川県豊島が参考になろう。

3.7.3 公開講座の成果

総申込者 52 名、講座参加総数 102 名。

このことから理解できるように、昨年までに比べると参加申込者が大幅に増えた。この理由として以下の理由が考えられる。(1) すべての講座実施場所を本学から八戸公民館に移した。(2) すべての講座実施時間を土曜日の午後 6 時から 8 時 10 分に統一した。(3) 八戸市の広

報に掲載してもらった。(4) チラシ配布場所を少し拡大した。(5) 内部の協力体制が比較的うまくいった、(6) 各講座担当者にキャッチフレーズを考えてもらった、(7) ポスター制作、完成時期を例年より早めた等が考えられる

3.7.4 今後の課題

以下のようなものが考えられる。

- (1) 講座内容、実施をどれだけ多くの市民に知らせられるかが重要。このためには広報活動をいかに効率的、かつ広範な地域に対して行えるか。その方法の考案。
- (2) 内部の協力体制をいかに確保できるか。一部の人に負担が偏らないような仕組みと全教員の協力と理解が必要。
- (3) 公開講座を持続的に実施するための環境の確保。例えば、総合教育センター教員が学科の公開講座にも手伝わされることの排除。これは発表者の恒常的な確保にも影響する。
- (4) 心理学が非常に人気であった。心理学は「公開講座」には不可欠かもしれない。

（後記）

今回、公開講座の準備中に私が病で倒れるというアクシデントがあり、一時期、高橋康造先生に公開講座の責任者をお願いすることになった。また業務に復帰してからも様々な人の助力を受けた。また、センターの先生方には、実施に当たって、事前準備、さらには当日には講演補助者として毎回二人ずつ、会場の準備、受付、

発表者の手伝い、掃除などの仕事をお願いした。また、センター事務の立花桂子さんに、結局、事務的なものからパン、クッキーの手配まで一切やっていただい。ここに謝意を表しておきたい。(完)

4. ま と め

全学科と総合教育センター参加による八戸工業大学公開講座が2年目を終えることができたが、どの講座も活気に溢れるもので、受講生の熱心さと楽しさが伝わるものであった。今年度の成果を纏めると、1) 特徴のある講座の人气が高く、場合によっては参加料を上げることも考えられる、2) 学生アルバイトが好評、3) 街中での開催は人を呼ぶ、4) 市の広報やメディアをできるだけ利用する、5) 参加者から次期テーマの提案が出た講座もある、6) 大多数の講座で、参加者から継続要求が出された、などである。スタッフの中でも、学生にとって、受講生の真摯な姿に触れ、されたことのない質問を受けるなどの経験は、この上ない勉学の間となった。学生にとって、社会人との直接交流が教育上重要であることを実感させられた。終了後のアンケート結果は、受講生の充足度の大き

さを示しており、開講側では実行後の充実感を味わうと同時に、この講座を発展的に維持することの重要性を認識した。また、講座に参加することが楽しいという評価がひとつのキーワードでもあり、この点を開催側が意識することも重要である。一方、開催場所の拡大や開催期間の延長、複数回の開催など新たな要望も聞かれ、今後の課題として考慮したい。これらの率直な意見、要望を教育や研究の指針として役立てていく必要がある。また、本学独自の教育や研究の積極的な開示などを公開講座として開催することも検討課題である。一方、本学が受審した日本技術者教育認定機構(JABEE)との関連から見ると、公開講座は直接社会に開かれた窓として機能しており、学内の教育・研究情報の公開と相互利用としての役割も果たしている。更に、計画中のメディアセンターとの整合性を考慮することも考えられる。公開講座の開催が八戸工業大学の理解に繋がり、大学を発展させることはもちろんのこと、北東北の文化の発展や産業の進展に結がることを願うものである。

学内の複数の部局の協力が得られたからこそ、この講座が終了できたのであり、関係部局の方々に感謝申し上げます。